

所 感

岩 谷 旨 夫

技術の進歩は日を追うて激しくなり、とどまる処を知らない実情にある。産業の発展は技術の進歩によって達成されるものであり、技術水準の一步の遅れは百歩の後退であるとさえ言われている。

東南アジア諸国においても、各国はそれぞれの構想の下に工業化を急いでおり、経済確立を輸出貿易に依存しているわが国では、海外市場獲得のためには品質の向上、原価の低減に不断の努力を傾くべきは勿論であり、これが達成には一に技術の向上に期待する処が大である。

戦後の目覚しい技術革新の渦中であって、われわれ企業体内の研究活動は、数多くの困難な問題を孕んでおり、殊に創立以来歴史の浅い当社の研究部内においてはなおさらであるが、われわれは研究者としての絶えざる努力と協力とにより、一步一步研究体制の確立を期したいものである。

絶えざる研究によってこそ、技術水準の進歩は期し得られるものである。企業体内の研究員は目前のあらゆる事象に捉われることなく、真理、未知の探究にひたむきな情熱を沸かす態度が望ましいものである。

よき伝統は短時日に生まれるものではなく、研究に対する情熱こそ当社将来の歴史を育てる力となり、礎となることを確信するものである。そしてよりよき研究員を育てる環境を育成することは、経営者の大きな任務でもある。

“天才とは天が与える1パーセントの靈感と彼が流す汗の99パーセントからなるものである。”

(当社取締役、社長室総務)